

江戸時代の立山参詣の費用

野口 安嗣

はじめに

江戸時代、立山は修験者や行者の修行の場にとどまらず、武士や文人・学者、そして農民や町民といった庶民にいたるまで多くの参詣人をみるにいたった。¹⁾ こうした傾向は、立山に限らず、世の名高い全国の寺社・霊場や霊山にもあてはまる。その背景には、幕藩体制の確立による社会の治安の安定や、農業技術の進歩・普及が生産力を高め農民の暮らしを向上させ、国内の商業・流通経済の発達が行商人や商人の成長を促したからである。²⁾ 参勤交代による街道の整備、旅籠などの宿場の完備、貨幣経済の進展による貨幣の流通や為替制度の発達は、容易に旅に出かけ旅自体を楽しむことを可能にした。

しかし、当時の幕藩体制の下にあっては、現在のように自由に旅に出かけられるわけではなかった。旅に出るには必ず幕府や藩の許可書「手判」が必要であり、街道に設置されている関所で「手判」（過書・通行手形）の改めを受けなければならなかったため、庶民が領国外に出るのは困難をきわめた。ただし、すべてが許可されなかったわけではなく、信仰のための寺社参詣や医療のための湯治は比較的容

易に認められていた。そのため、伊勢神宮・高野山・善光寺・西国札所などの社寺や霊場、富士山・白山・立山などの霊山への参詣は多くの人々を旅にかりだし、道中記や紀行文が残された。立山参詣の記録もその1つであり、先行研究において数多く紹介されているが、立山参詣を社会経済史の面から論じたものはみられない。³⁾

そこで本稿では、先学の研究成果をふまえて、筆者がこれまでに管見した立山参詣に係わる記録を検証し若干の考察を付記していく。さらに、その際にかかった参詣の費用について、現存資料により現代の貨幣価値との換算が可能な江戸時代後期の紀行文『立山遊記』⁴⁾や古文書史料の『名苗家文書』⁵⁾をもとにして換算を試みる。

これにより、江戸時代の立山参詣の人々の身分や職種、登拝の目的などの様相を論ずるだけでなく、参詣費用を現代の貨幣価値におきかえることにより、立山における物流や物価などについてより具体的に考察し、当時の人々の立山参詣のありかたをとらえていきたい。

1. 江戸時代の立山参詣の記録

筆者がこれまでに確認した立山参詣の記録の初見は、室町時代の文明18年（1486）、准后道興の『廻国雑記』⁶⁾である。天台修験道の本山、聖護院門跡の准后道興は、文明18年（1488）6月に京都を立山へ出立し、北陸から東国、奥州の各地を巡歴して紀行歌集文を記した。立山では、立山禅定や地獄谷をめぐる壮大な様子を詠んでいる。

「この身にて 和多流もうれし 三つ世川
さりとも後の 世にハ志づまし」
「志ての山 その志な、や わきかへる
湯出しつみの かすをみすらむ」

室町時代には、加賀白山金剣宮の社僧堯恵が寛正6年（1465）に『善光寺紀行』⁷⁾・文明18年（1486）

に『北国紀行』⁸⁾の紀行文で平野部から立山を遠望した様子を記しているが、筆者が管見する限り立山への登拝の記録は江戸時代に至るまでみられない。そこで、江戸時代、立山に訪れた参詣者が著した紀行文や道中記のうち、立山登拝の箇所の内容を時系列に沿って紹介する。

① 卍山道白 『室堂永代燈明料奇進状』⁹⁾

延宝8年(1680)～元禄4年(1691)にかけて加賀藩曹洞宗大乘寺住職卍山道白が立山に登拝した。その際に、室堂に永代燈明料として金子1両を奉納した。

② 大淀三千風 『日本行脚文集』¹⁰⁾

天和3年(1683)4月、俳人の大淀三千風は、仙台を出立し越後を経て、6月12日に越中に入る。越中には20日余り滞在し、その間に立山に登拝した。

未明 [芦峯寺] → [葛藤の絃橋(藤橋)] →
[材木坂] → [天津原(弥陀ヶ原)] →
[一ノ谷] → [(獅子鼻)の護摩窟] →
夕刻(申の終)[室堂]泊

翌日 [室堂] → [祓所] → [(雄山)山頂] →
[室堂] → [地獄谷] → [芦峯寺]

三代風は、山装束に身をととのえ木綿襷に櫛を腰に差し、粃米(洗い米)を袋に入れて首に掛け、一の越から頂上を目指している。頂上では、「朝日の御影」(ご来光)や「青紫の輪光」(ブロッケン現象)を拝み、はるかに富士山や白山を望んでいる。室堂にもどり、地獄谷巡礼に行く。「千蛇が池」(みくりが池か)を左に見ながら劔岳を仰ぎ、その偉容に圧倒される。その後下山して芦峯から立山神司の佐伯本雄の米道村の屋敷に招かれ2日間滞在している。

③ 橋三喜 『一宮巡詣記』¹¹⁾

元禄9年(1696)7月、神道家の橋三喜は、越後

の糸魚川より船で魚津に入り、滑川、下田を通り芦峯寺で宿泊し、翌日立山に登拝した。

5日 [芦峯寺] → [金坂] → [材木坂] →
[ぶせう坂] → [しかりばり] → [禿杉] →
[ぶな坂] → [小鮎坂] → [桑谷] →
[不動堂] → [弥陀ヶ原] → [一ノ谷] →
[獅子鼻] → [上市場下市場] → [室堂]泊
6日 [室堂] → [(雄山山頂)立山権現の御前] →
[地獄谷] → [姥が懐] → [芦峯寺]

三喜は、延宝3年(1675)から元禄10年(1697)の23年間にわたり全国の一宮を巡拝しており、越中には元禄9年7月3日から11日まで滞在している。

立山の絶頂には小鼯が多く、「ライノ鳥」(雷鳥)などを見たこと記している。その後、地獄谷を巡り、芦峯村へ戻り、姥の木像66体が祭られている「姥の社」(媯堂)や慈興上人の墓に詣でている。また芦峯寺より3里はなれた岩峯寺にも立山の社があり、坊中に妻帯者が多いことを記している。

④ 池大雅 『三岳記行』¹²⁾

宝暦10年(1760)6月、文人画家の池大雅は、高芙蓉・韓大年と連れだって京都を出発し、白山・立山・富士山に登り9月中旬に京都に戻る旅を行った。7月8日に金沢から倶利伽羅峠を越えて越中に入り、立山には11日から登拝した。

10日 [富山ひものや(240文)] →
[岩峯寺延命院にて昼食(100文)／絵図・
血盆経代(48文)／草鞋・茶代(20文)] →
[うば堂御膳料(32文)] → [芦峯寺]泊
11日 [芦峯寺] → [道々小宮賽銭(30文)] →
[桑谷 こんぶ汁4膳(24文)] → [室堂]泊
12日 室堂近辺が暴風雨のため滞留
13日 立山室堂入用・山銭別山廻り(1貫212文)
室堂初穂料(100文)山之参銭(300文)
14日 芦峯寺権教坊造作料(金壺歩)

大雅らは、立山登拝のおり、道中での見聞記録や出納記録、立山・劔岳・別山などの風景スケッチをしたためている。なお、寛延3年（1750）にも立山に登っている¹³⁾、この旅は2度目の登拝になる。

⑤ 佐藤季昌（月窓）『立山紀行』¹⁴⁾

天明年間の6月、富山藩に仕えていた歌人佐藤季昌（月窓）は、安紹能雄らとともに従者をいれて4人で、5泊6日の立山登拝を行なった。

19日 [富山] 出立→[中市]→[横内]→
[大森]→[岩峯寺]→[横江]→
[芦峯寺] 泊
20日 [芦峯寺]→[藤橋]→[こがね坂]→
[材木坂]→[朽平]→[桑が谷] 泊
21日 [桑が谷]→[中津原（弥陀ヶ原）]→
[市の谷]→[獅子が端]→[鏡石]→
[三宝崩れ]→[室堂]→[一の越]→
[五の越]→[広前（山頂）]→[室堂] 泊
22日 [室堂]→[地獄谷]→[室堂] 泊
23日 [室堂]→[鏡石]→[姥が懐（姥石）]→
[桑が谷]→[藤橋]→[芦峯寺] 泊
24日 [芦峯寺]→[岩峯寺]→[中市村]→
[富山] 帰宅

季昌一行は、20日に桑谷、21日は室堂に泊まって翌22日に登頂する予定だったが、22日の天候が怪しかったので、その日の夕方に登拝する。彼は、願いを果たした感激で、広前でひれ伏して泣き、数々の宝物¹⁵⁾や、本尊阿弥陀如来＝伊弉諾尊・不動明王＝手力雄命を拝んでいる。翌日は天候悪化のため、地獄谷を廻って室堂で再宿し、その後下山している。

なお、『立山紀行』は寛政10年（1798）4月に松羅子月窓の名で書かれたものだが、文中に嬭堂が「近頃焼亡のことあり」¹⁶⁾と記されたり、「十とせあまりのむかし、此山にのぼり」と記されていることから、10年余りまえの天明年間に登ったことがわかる。

⑥ 石崎古近『立山禪定』¹⁷⁾

寛政9年（1797）7月、福光の肝煎石崎古近ら5名が2人の従者を連れて、17日から23日の6泊7日で立山に登拝した。

17日 [福光] 出立→[富山] 泊
18日 [富山]→[岩峯寺]→[芦峯寺権暁坊] 泊
19日 [芦峯寺]→登山→[室堂] 泊
20日 [室堂] 泊
21日 [室堂]→[芦峯寺]→[岩峯寺覚乗坊] 泊
22日 [岩峯寺]→[富山] 泊
23日 [富山]→[福光] 帰宅

古近一行は、登拝にあたり毎年福光に布教に来てなじみの「岩峯寺覚乗坊」で山手形をとり、「芦峯寺権暁坊（権教坊か）」に泊まる。帰りも同宿する予定で荷物を置いて登山したが、下山すると岩峯寺覚乗坊の息子が嬭堂付近で酒や料理を用意して出迎え、ぜひ今宵は覚乗坊に泊まってほしいと頼むので、先約の権暁坊を断ってなじみの岩峯寺覚乗坊に泊まったと記している。

また、同行の田辺氏が地獄谷の温泉を汲んで立山の図を描こうとして水入れを買ったが、芦峯の宿に忘れたこと。自分自身も立山産の異草（カラタケ似の草と、姫百合似の草）を持ち帰ったが、岩峯の宿でなくしたと記している。これらの件について、高山の霊草や霊水を持ち出ししたりしたら、山神のたたりがあるので、立山権現が憐れみ取り返したのだとして、「身の毛もよだって、貴くぞ覚えぬ」と驚愕している。

⑦ 海保青陵書簡¹⁸⁾

文化3年（1806）7月、経済学者海保青陵は、立山登拝を行なった。前年の文化2年（1805）夏から金沢に滞在し、武士や有力町人たちに加賀藩の財政改革をといており、翌年の3月からは、高岡に入り学塾「修三堂」で講義を行ない、越中滞在中に立山

に登拝した。¹⁹⁾

4日 [富山] → [藤橋] → [桑溪] →
[一ノ谷] → [室堂] → [絶頂]

青陵は、この中で加賀藩は立山の資源を古法に基づいて禁令を発するのではなく、硫黄や明礬などの鉱山資源を開発し、檜や栢などの木材を採取することで、藩の経済の興隆に役立てるべきであると論じている。

⑧ 野崎雅明『立山ノ記』²⁰⁾

文化9年(1812)6月、富山藩士野崎雅明は、4泊5日で立山に登拝した。

25日 [富山城] → [岩峯寺] → [横江] →
[千垣] → [芦峯寺] 泊
26日 [芦峯寺] → [藤橋] → [金坂] →
[千寿が原] → [材木坂] → [鷲が窟] →
[美女杉] → [一穴(しかりばり)] →
[鬚頭杉] → [朽坂] → [伏拝] →
[不動堂] → [弥陀ヶ原] → [追分] →
[一ノ谷] → [獅子が端] → [室堂] 泊
27日 [室堂] → [浄土山] → [雄山] →
[大汝] → [別山] → [大走・小走] →
[玉殿の窟] → [地獄谷] → [室堂] 泊
28日 [室堂] → [鏡石] → [姥が石] →
[朽坂] → [芦峯寺] 泊

雅明は、立山禪定の行程をその距離や見聞きした名所を伝承や歴史などを踏まえ、漢文で詳細に記している。27日の登拝では、浄土山に向かって登りはじめ後ろを振り返ってみると、多くの人々が連なって登っており、その様子を「顧後他登山者亦魚貫来」と魚をクシに刺したようだと述べている。

⑨ 野田泉光院(成亮)『九峯修行日記』²¹⁾

文化13年(1816)6月、日向国の修験者野田泉光

院は従者の平四郎とともに、北陸道越後から魚津・滑川を経て、上市の大岩不動に詣で門前に宿泊した。翌日、立山麓岩峯寺の宿坊南泉坊に着くが、まだ立山が山開きされていなかった。そこで、自分たちの他にも美濃の六部や京都の出家なども待っていたので、岩峯寺の坊中に10日頃の山開きを明日から登れるように評定してもらい、金子1歩(4人で割り勘)と山銭238文を支払い立山に登拝した。

5日 [岩峯寺] → [芦峯寺] → [藤橋] →
[桑谷] 泊

6日 [桑谷] → [室戸(室堂)] → [上官] →
[室堂] → [地獄谷] → [室堂] 泊

7日 [室堂] → [岩峯寺南泉坊] 泊

成亮は、「下山の途中、立山は日本一の名山かと聞いていたが、大峰よりもはるかに劣った山だと心の中で思った。すると、何となく後から突き飛ばされ転んでしまい、その時金剛杖の錫杖が折れてしまった。これは、何者の仕業かと怒り心頭していると、足下に白雲が現れ横切っていった。」「夜、室堂で不思議な夢を見たが他言しない」と恠異な体験を記している。

なお、彼は文化9年(1812)から文政元年(1818)の6年余りにわたって全国の55ヶ国を旅している。立山へは前年の文化12年(1815)にも7月25日に越前吉崎から金沢・能登の石動山を経て越中に入り、登山を試みたが、山じまいで登拝することができなかったため、当年あらためて登拝している。

⑩ 尾張藩士某『三ツの山巡』²²⁾

文政6年(1823)6月、尾張藩士某は友人と3名で、35日間をかけて白山・立山・富士山を巡る「三禪定」の旅に出かけた。

立山には、6月17日に登拝し、峯本社に参詣したあと室堂に宿泊し、翌日に追分から松尾峠を越えて立山温泉にも宿泊した。

16日 [富山城下] → [中川原] → [荒屋] →
[横内] → [大森] → [岩峠寺 (山銭130文)]
→ [芦峠寺教算坊] 泊

17日 [芦峠寺教算坊 (150文)] → [嬬堂] →
[ホツタテ坂] → [藤橋] → [小金坂] →
[草負坂] → [材木坂] → [熊負大権現] →
[鷲の岩屋] → [美女杉] → [シカリバリ] →
[カムロ杉] → [ブナ坂] → [カリヤス坂] →
[仏が原 (弥陀ヶ原)] → [一ノ谷] →
[弘法原] → [小松坂] → [鏡石] →
[室堂] → [峯本社] → [室堂] 泊

18日 [室堂] → [地獄谷] → [鏡石] →
[姥石] → [立山温泉 (232文)] 泊

19日 [湯場 (立山温泉)] → [原村] →
[小見] → [藤橋] → [亀谷] → [千垣] →
[横江] → [中野] → [下田] → [上市] 泊

この藩士は、本文冒頭で「加賀の白山、越中立山、駿河の富士、此三つの山を巡りたく、年頃、日比、望むといへとも、仕官の身なれば、」として願いが叶わなかったが、この度天の恵みか時節到来して、友と旅立てることを喜んでいる。

立山では、三河国講中寄進の芦峠寺善道坊の梵鐘²³⁾の銘や絵、藤橋を恐る恐る渡っているスケッチ画、立山温泉の見取り図などを描いている。また、山頂は霧で覆われ、「四方洋々たる大海のごとし」と感想を述べ、峯本社では様々な宝物¹⁵⁾を見せられたと記している。

⑪ 『三山道中記』²⁴⁾

文政6年(1823)6月、尾張国知多郡大府村の13名が6月8日～7月28日まで51日を費やして白山、立山、富士山を巡る「三禅定」の旅に出かけた。立山には6月21日に登拝した。

19日 [高岡] → [富山城下] → [岩峠寺] →
[芦峠寺相真坊] 泊

20日 [相真坊] → [うば道] → [ふじ橋] →
[こがね坂] → [草おい坂] → [かむ路杉] →
[ざいもく坂] → [熊野権現] →
[わしが岩や (21番観音)] →
[くわが谷茶屋] → [見だが原] →
[一の谷] → [獅が鼻 (29番観音)] →
[かがみ石] → [室堂] 泊

21日 [室堂] → [六道めぐ地蔵] → [じょうど山] →
[三んげ坂] → [一之越] → [五之越] →
[御本社] → [室堂] → [地獄めぐり] →
[くわが谷] → [ふじ橋] → [芦峠寺] 泊

この道中記は、場所や里程・宿賃、簡単なメモなどを記録している。特に、立山禅定の地獄巡りがよほど印象深かったとみえ「見どりか池 ほうかんちごく 油かけ石 油しめ石 いもじやちごく かりうどじごく とうくわつちごく ちいけちごく うへのゆきそまりてあり八万ちごく かじちごく だんごちごく かざりやちごく こんやちごく 油屋ちごく 百姓ちごく うわなりちごく もうじゃちごく はかりやちごくえんま大おう有」と名前を挙げ地獄谷の様子を詳細に記している。

⑫ 上田作之丞『老の路種』²⁵⁾

加賀藩の学者上田作之丞は、登拝年は定かではないが、「愚老立山に登らんと志す事数年、一時勝因を得て登山す」として立山登拝をはたした。

[藤橋] → [草生坂・金坂・材木坂] →
[弥陀が原] → [室堂] → [御前 (本社)] →
[地獄谷] → [室堂] 泊

作之丞は、天保6年(1835)冬から『老の路種』の序を著し、書中巻5に立山登拝を収めている。

その中で、藤橋を足がすくみ目がくらみながら渡り、峻絶を越えて御前に至っては天下眼下に有り等と述べ、高山植物を観察し、地獄谷では「聞きしに

増りて恐るべきよそほひなり」と驚き、室堂に泊まっては、人の住むべき所とは思えないと記している。

⑬ 大塚敬業『登立山記』²⁶⁾

天保11年(1840)6月、富山藩士で漢学者の大塚敬業は、佐伯桜谷など7人で4泊5日の立山登拝を行った。

- 28日 [富山府] → [巖倉邨(岩峯寺)] → [葦倉村(芦峯寺)] 泊
29日 [芦峯寺] → [乳母祠(媯堂)] → [藤橋] → [材木坂] → [部奈坂] → [桑谷] → [弥陀原] → [鏡石] → [一ノ谷] → [獅子鼻] → [室堂] 泊
30日 [室堂] → [浄土山] → [本祠(峯本社)] → [大難路] → [別山 硯水池] → [大走] → [小走] → [賽の河原] → [玉殿の窟] → [室堂] → [地獄谷] → [室堂] 泊
1日 [室堂] → [乳母懐] → [弥陀原] → [巖倉邨(岩峯寺)] 泊
2日 [岩峯寺] → [富山] 帰宅

敬業は、宿泊した室堂について、2棟でそれぞれ30席あり、当日は「人無士民之別、宿者填満」と武士や庶民の身分に関係なく、多くの人が泊まり、「戸外ハ厠ト為シ、便溺ハ地ニ満チ、臭気悪ム可シ」と記し、トイレのない尿尿のあふれる室堂の様子を嘆いている。

しかし翌日に、浄土山に登り四方を見渡せば、近くに蟻獄(有峰)や龍獄(竜王岳)、西南に加賀の白山、東に信州の浅間山、南に飛驒の乗鞍岳や信州の槍ヶ岳、遠くに富士山を望むことができ、この景色の壮観さに感動している。

⑭ 『五ヶ山大牧入湯道の記』²⁷⁾

天保12年(1841)6月、人物は定かではないが1

日から17日にかけて、寺社参詣や温泉廻りを行った。一行3名は6日・7日に道連れ3人と先達2人の8人で立山に登拝した。

- 5日 [上獄村] → [岩峯寺] → [横矢村] → [血懸村] → [芦峯寺(宗吉坊)] 泊
6日 [芦峯寺] → [藤橋] → [千寿ヶ原] → [材木坂] → [鷲ノ岩屋] → [桑谷] → [弥陀ヶ原] → [一ノ谷] → [獅子ヶハナ] → [畜生原] → [鏡石] → [市場] → [室堂] 泊
7日 [室堂] → [浄土山(阿弥陀如来)2体] → [一ノコシ~五ノコシ] → [御本社] → [大汝(十一面観音)] → [別山(帝釈天)] → [大走り小走り] → [サイノ河原] → [玉殿ノ岩屋] → [地獄谷(地蔵菩薩)] → [室堂] 泊
8日 [室堂] → [芦峯寺(宗吉坊)] 泊

本書の筆者は、御本社から眺望した山々の山名や地獄谷の各地獄の名称、立山にそれぞれ祀られている本尊を詳細に記している。

また、室堂では6月の初めで、宿泊者も少なくゆっくり休めた感想を述べている。

⑮ 金子盤蝸『立山遊記』⁴⁾

天保15年(1844)6月、加賀藩士で儒学者の金子盤蝸は、榊原守邦と連れだって6月22日に金沢を出発し7月8日まで17日間を費やし、立山への旅に出かけた。

- 24日 [富山] → [太田本郷] → [センナ(善名)村] → [中ノ番] → [岩峯村(多賀坊)] → [横江村] → [千垣村] → [芦峯村(玉泉坊)] 泊
25日 [芦峯村] → [藤橋] → [千手ヶ原] → [黄金坂] → [草生坂] → [材木坂] → [美女坂] → [シカリハリ] → [フシヲガミ] →

[ブナ坂] → [桑谷] → [瀬戸坂] →
 [弥陀ヶ原] → [追分]・南 [老婆懐 (下山)]
 北 [一ノ谷 (登山)] → [小鎖・大鎖] →
 [獅子ヶ鼻] → [碁石原] → [鏡石] →
 [室堂] → [地獄巡り] → [室堂] 泊
 26日 [室堂] → [浄土山] → [懺悔坂] →
 [一ノ越～五ノ越] → [(雄山) 絶頂] →
 [大汝] → [別山] → [玉殿岩] →
 [室堂] → [鏡岩ノ追分] → [桑谷] →
 [藤橋] → [芦峯 (福泉坊)] 泊

盤蝸は、立山登拝にあたり、行程や時刻、かかった費用などを詳細に記録している。

2人は、6月25日の午前6時前に芦峯寺を出発し、室堂に午後4時過ぎに到着したあと、地獄谷廻りに出かける。室堂の宿泊では、大塚敬業と同様に「戸外ハ毎日の人糞ニテ、夜間濫リニ歩ヲ進ムレバ、誤マリテ足ヲ穢ス故出ズル能ワズ」と悲惨な実情を嘆いている。翌26日の午前6時前には浄土山へ登り始め、雄山、別山と三山をかけめぐり室堂に戻る。室堂で泊まる予定だったが、中語を先に帰したため食事の支度をしてくれるものがいなく、やむなく下山する。午後9時過ぎに芦峯寺に着き、玉泉坊に宿泊しなければならないのを貧家だったため口実をつけてきれいな家の福泉坊に泊まったと記している。

なお、この登拝でかかった費用をもとに、次章で立山参詣費用について考察する。

⑯ 『立山参詣入用記』「名苗家文書」⁵⁾

文化7年(1810)7月、葛葉村名苗新重郎は、8日から13日の5泊6日で立山に登拝した。²⁸⁾

8日 [氷見] 出立→ [富山] 泊
 9日 [芦峯福泉坊] 泊
 10日 [室堂] 泊
 11日 [桑谷茶屋] 泊
 12日 [富山] 泊

13日 [氷見] 帰宅

『立山参り入用留帳』「名苗家文書」⁵⁾

天保10年(1839)6月、葛葉村新十郎倅名苗善三郎は、15日から20日の5泊6日で立山に登拝した。
 (【史料①】)

15日 [氷見] 出立→ [放生津] 泊
 16日 [芦峯先祖寺] 泊
 17日 [室堂] 泊
 18日 [芦峯寺先祖寺] 泊
 19日 [小杉町] 泊
 20日 [氷見] 帰宅

『立山参詣入用留帳』「名苗家文書」⁵⁾

弘化3年(1846)6月、葛葉村新十郎倅名苗茂三郎は、27日から7月2日の5泊6日で立山に登拝した。(【史料②】)

27日 [氷見] 出立→ [富山] 泊
 28日 [芦峯寺惣衛門] 泊
 29日 [室堂] 泊
 30日 [芦峯寺惣衛門] 泊
 1日 [高岡] 泊
 2日 [氷見] 帰宅

葛葉村新十郎と息子2人は、立山登拝にあたっての里程や出納記録について詳細に記している。そこで、この登拝でかかった費用についても、次章で考察の対象とする。

⑰ 田中屋権右衛門『應響雑記』²⁹⁾

嘉永4年(1851)7月、氷見の町役人田中屋権右衛門の息子八郎は、稻惣方松次郎、田中屋紋次郎倅、笹村屋三男などと連れだつて、16日から22日の6泊7日で立山に登拝した。

登拝にあたって、里程などの記録は残っていないが、予定より1日早く帰ってきたためにあわてて近

隣縁者を呼んで祝宴を催し、翌日息子八郎が土産を配ったと記している。

⑩ 三宅嘉右衛門『善光寺并北國越中立山参詣』³⁰⁾

文久3年(1863)7月、美濃国不破郡関ヶ原の三宅嘉右衛門と八重夫婦は、6日から8月3日まで約1ヶ月をかけて善光寺と立山参詣を果たした。立山には、越後から北陸道親不知子不知を通り市振をへて滑川に入り23日に嘉右衛門が登拝した。

- 21日 [滑川] → [谷口村] → [芦峯教蔵坊] 泊
- 22日 [芦峯教蔵坊] 雨天にて逗留
- 23日 [芦峯教蔵坊] → [こもり堂(室堂)] → [地獄巡り] → [室堂] 泊
- 24日 [室堂] → [奥の院] → [こもり堂] → [芦峯教蔵坊] 泊

嘉右衛門は、自分が立山に登拝している間、女房の八重は、「立山ハ女人禁制ニ付、家内八重ハ登山内きよ蔵坊ニ逗留、立山麓ニうば尊と申仏あり、是迄参詣」と立山は女人禁制のため芦峯寺にとどまり嬬堂などに参詣していたと記している。

小結

立山に訪れた登拝者の記録を成立年に則して紹介したが、それぞれの身分や階層・職種などに注意を払い、参詣の様相について考察する。

修験者や行者、僧侶の立山登拝は、中世の准后道興の記録があり、近世に入っても卍山道白、橘三喜、野田成亮などが登拝している。さらに江戸後期の天保11年(1840)7月には吾妻の行者義賢が立山で念仏籠行を行っている³¹⁾ことから、各々宗教的目的は異なっていたとしても、江戸時代をとおして、修験者や行者、僧侶の立山登拝は絶えることなく行われたと考えられる。

武士の立山登拝は、富山藩士の佐藤李昌(月窓)や野崎雅明、大塚敬業、加賀藩士の上田作之丞や金

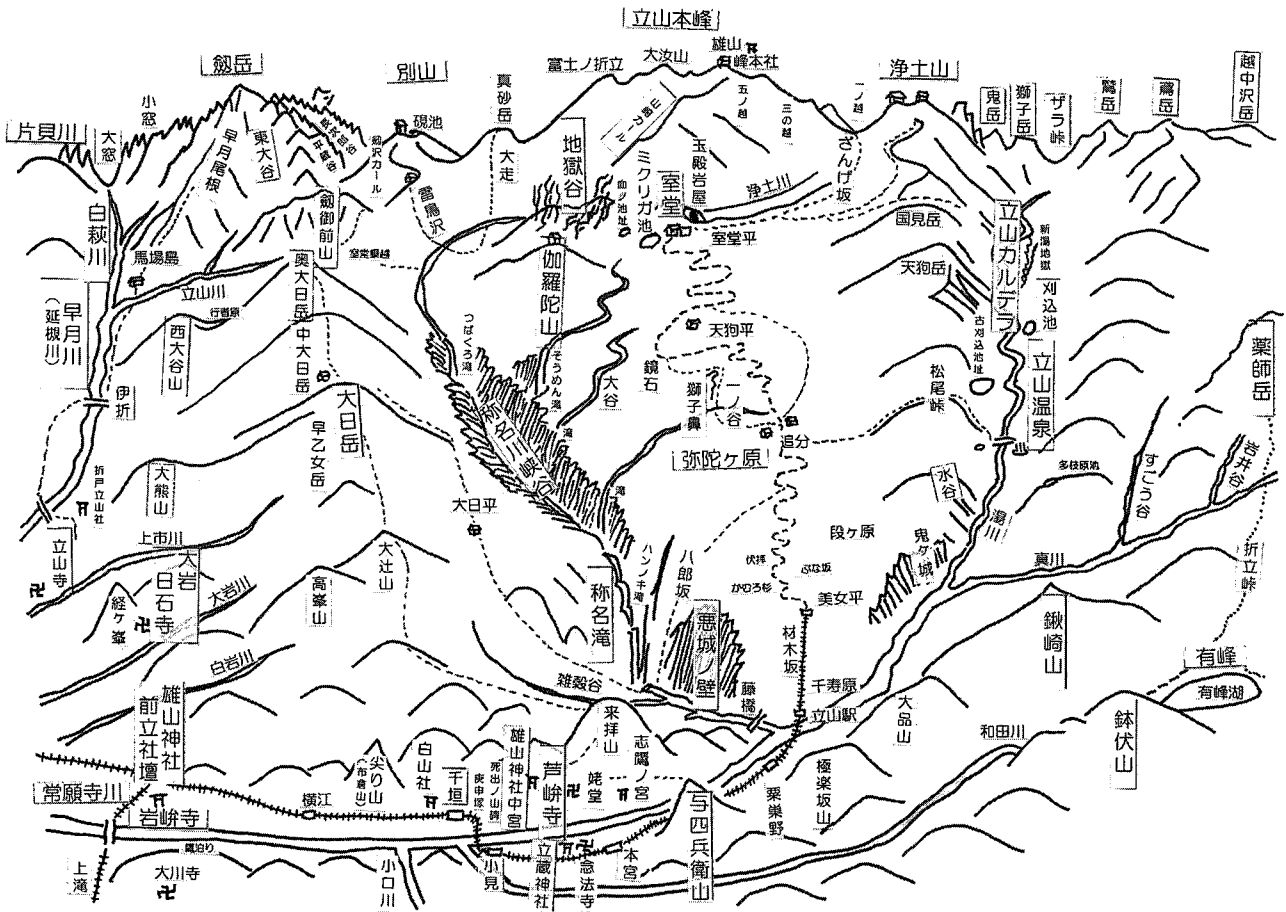
子盤蝸らが登拝しており、登拝の様子ばかりでなく所々の伝承や歴史・地誌などを踏まえたり、和歌や漢文で表現したものもあり、当時の武士階級の博識さが伺える。また、尾張藩士の『三ツの山廻』は、山へのあこがれを強く感じ取ることができ、かれらを山へ駆り立てた当時の情報とはいかなる性質のものであったのだろうかという疑問も浮上する。

文人の立山登拝は、大淀三千風が各地の地誌や来歴を詳細に記し、池大雅は旅の模様を写實的に伝えており、立山図は芦峯寺のスケッチなどとともに、8曲1隻の屏風にしたり、現在京都国立博物館に所蔵されている。また学者の海保青陵が立山に登り、立山の経済開発を加賀藩に説くなど、信仰登山とは必ずしも違った目的も見うけられる。

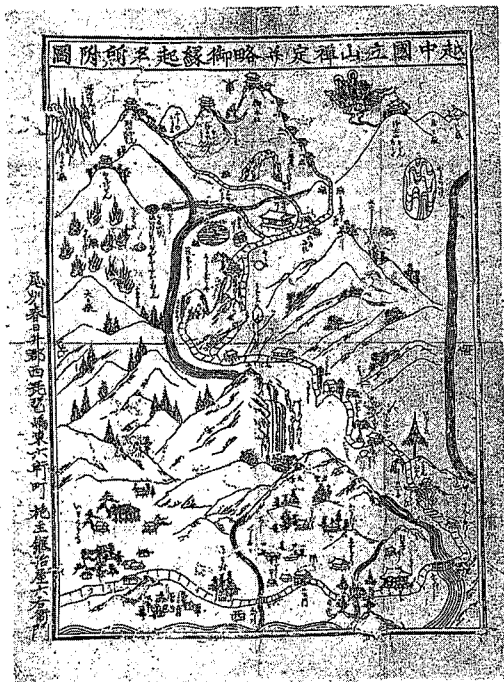
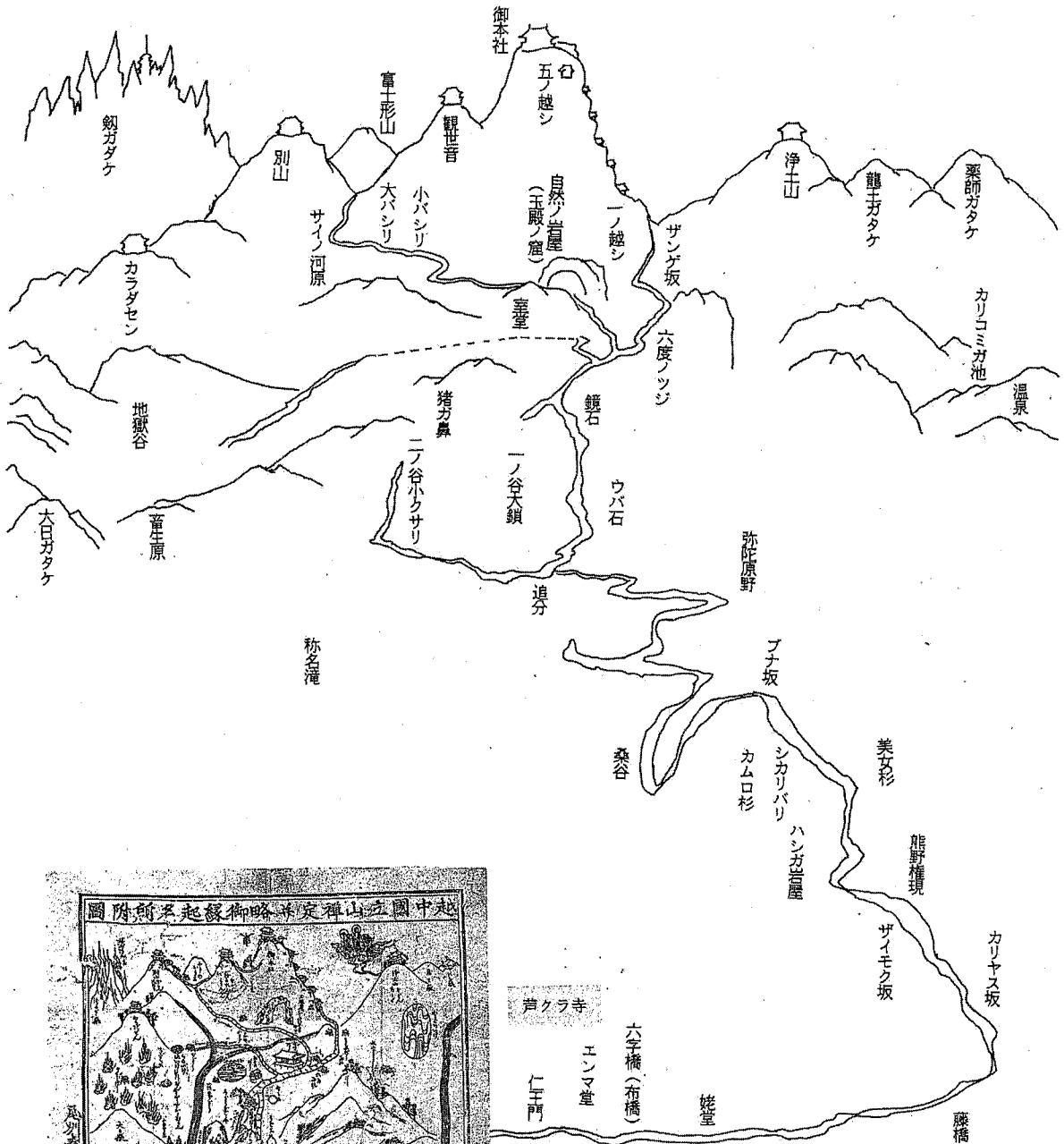
町人・農民など庶民の立山登拝は、県内では福光や氷見から6日から7日かけて参詣していることが、道中記から確認できる。また、尾張国知多郡大府村からの13人の集団参詣や、美濃国不破郡関ヶ原の夫婦参詣のように、近世後期には庶民においても、立山を含め全国各地の霊山や寺社・霊場を巡る旅の様相が盛んにみられた。³²⁾そこには、寺社参詣の旅といながら物見遊山を楽しむ庶民のしたたかさを感じずにはいられない。

立山参詣に訪れた人々は、それぞれ身分や職種、立山登拝の目的は違っても、常願寺川北側段丘上に位置する集落[岩峯寺] → [横江] → [千垣] → [芦峯寺]を通り抜け、[藤橋]を渡り、[千寿が原] → [黄金坂] → [材木坂] → [美女坂] → [シカリバリ] → [ブナ坂]を登り、[桑谷]で休憩(昼食)をとり、[弥陀ヶ原]から[一ノ谷]の鎖場の難所を越え、標高2450mの[室堂]に至っている。(第1図、第2図参照)『立山遊記』によれば、午前6時頃(朝6ツ)に芦峯寺を出発し午後4時頃(7ツ過ぎ)に室堂に到着していることから、ここまで登拝にかかった時間は、約10時間であったことがわかる。[室堂]からは、浄土山や雄山の峰本社、別山を目指

したり、地獄谷を巡ったりしてもと来たコースを下
山しており、このルートが一般的に確立されていた
と考えられる。³³⁾



【第1図】立山周辺概念図
(作画、加藤基樹氏 原画「立山山中略絵図」作成 廣瀬誠氏、富山県立図書館蔵)



【第2図】立山登拝案内図
58cm×41cm館蔵

江戸時代後期成立。立山登拝の道筋や立山の縁起、伝承などを記した木版画。山岳景観や行程、名所などが注記されており、多刷して、登拝者に販売された。

註『靈山巡詣』（富山県[立山博物館]特別企画展 解説図録より転載）32頁所収 一部修正・加筆

2. 近世後期の立山参詣費用

2-1 『立山遊記』(1-⑤)にみる立山登拝の旅費

天保15年(1844)6月、加賀藩士で儒学者の金子盤嶋は、榊原守邦と連れだつて25日・26日に立山登拝を行った。その際にかかった諸経費について、記載されたものは以下の通りである。

6月24日

120文 善名村で中語を5人で600文で雇う
 6文 常願寺川船賃
 70文 岩嶺寺多賀坊にて茶代
 12文 岩嶺寺にて、血盆経と小符購入
 150文 岩嶺寺にて、山銭
 12銅 姥堂 開帳
 100疋 御膳
 73文 玉泉坊 木賃 米1升
 70文 宿賃

6月25日

6文 桑谷関所にて関銭
 44文 室堂 御共料
 12銅 本社
 300文 三山(浄土山 本社 別山)上り賃

6月26日

150文 芦峯寺福泉坊宿賃

盤嶋ら一行は、立山に向かう途中の善名村(旧大山町)で、能美郡中嶋の百姓3名らとともに横井村甚右衛門を中語(登山者の荷物を運ぶ=強力)として雇い5人あわせて600文を支払っている。

岩嶺寺多賀坊では、血の池地獄へ収める血盆経と小符を12文で購入し、山銭150文を支払っている。ただし、この山銭の請取証は室堂で渡すが無くすともう一度支払わなければならないといわれている。

芦峯寺玉泉坊では、木賃で米1升を73文で買い、宿賃70文のあわせて143文支払っている。下山後は

芦峯寺福泉坊に泊まり、150文を支払っている。

さらに立山では、三山(浄土山、本社[雄山]、別山)巡りを行い、一山につき100文で合わせて300文を支払っている。

2-2 『名苗家文書』にみる立山参詣の旅費

2-2-1 天保10年(1839)の立山参詣の旅費

天保10年(1839)6月、氷見の葛葉村新十郎悴名苗善三郎ら6名は、15日から20日にかけて5泊6日で立山に登拝した。史料①は、その時の道中記を(横帳・仮綴)の全文翻刻したものである。

【史料①】

(表紙)

天保十年 葛葉村

立山参り入用留帳

新十郎悴善三郎 拾九歳

亥 六月十五日出立 廿日ニ帰宅

六月十五日出立 廿日ニ帰宅

葛葉村 善三郎

清蔵

今濱村

萬七

四右衛門

彦助

見内村

与三左衛門

メ六人

持参金子

一 壺両壺朱 金子

一 弍拾七匁 印紙

一 七百文 正銭

メ

一 壺歩

清蔵江

| | | | | |
|------------------------|-------------|-------|----------|-------------------------|
| 一 壹朱 | 十六日ニ | 岩嶺寺ニ而 | 一 七文 | 壹ノ越 ^も 五ノ越迄御明 |
| 一 壹朱 | 十七日ニ | むろ堂ニ而 | 一 拾貳文 | 御本社御明 |
| 一 壹朱 | 十九日ニ | 芦嶺ニ而 | 一 貳文 | 御かり堂ニ御明 |
| 一 貳朱 | 廿日 | 小杉ニ而 | 一 壹文 | 地藏ニ而上ル |
| 一 壹朱 | 廿日 | 高岡ニ而 | 一 壹文 | 峯入御明 |
| メ 貳歩貳朱 | | | 一 十貳文 | 別山御明 |
| 一 拾六匁 | 高岡等ニ而 | 遣い | 一 三文 | 桑谷ニ而茶代 |
| | 代 壹貫三百六十文 | | 一 貳百文 | 芦嶺先祖寺泊り |
| 一 七百文 | 所々ニ遣 | | メ 貳百五十文 | |
| メ 貳貫六十文 | | | 十九日 雨氣 | |
| 一 壹歩三朱 | 持帰ル | | 一 八文 | □□□ |
| 一 拾壹匁 | 印紙持帰ル | | 一 五文 | 江戸おこし |
| 六月十五日ニ出立 天氣 | | | 一 拾文 | 茶代うり等 |
| 一 貳文 | 泉ニ而茶代 | | 一 拾貳文 | 富山ニ而薬代 |
| 一 三拾六文 | 氷見より放生津迄船乗賃 | | 一 四拾文 | もくさ四十 |
| 一 貳百文 | 放生津ニ泊り | | 一 貳百五拾五文 | 小杉町稲炭屋ニ |
| メ 貳百三拾八文 | | | | 弥五左衛門方ニ |
| 十六日ニ富山ニ而買物 天氣 | | | メ 三百三十文 | |
| 一 五文 | わらんし壹足 | | 廿日 雨氣 | |
| 一 貳拾七文 | あめ | | 一 三文 | 大川はし賃 |
| 一 五拾七文 | 米代 | | 一 廿四文 | 五匁懸ろうそく |
| 一 三文 | 血盆經壹卷 | | | 貳丁高岡ニ而 |
| 一 三文 | 数珠壹 | | 一 四拾五文 | 泥香四ツ |
| 一 拾文 | わらんし貳足 | | 一 十四文 | せんこう貳わ |
| 一 貳文 | 本宮村茶屋ニ而茶代 | | 一 六拾五文 | うつわ五本 |
| 一 百五拾文 | 岩嶺寺ニ而山せん上ル | | 一 廿四文 | あめ |
| 一 貳百文 | 芦嶺寺先祖寺ニ泊り | | 一 四十文 | 扇子貳本 |
| メ 四百五拾七文 | | | 一 四十文 | うつわ貳本 |
| 十七日 天氣 | | | 一 百廿五文 | 酒五合代 |
| 一 六文 | 桑谷茶代 | | 一 八拾文 | 高岡重度薬并酒等品々 |
| 一 拾五文 | 地獄谷地藏御明 | | 一 壹文 | 木町舟ちん |
| 一 貳百文 | 三山御礼 | | 一 五文 | 守山ニ而わらんし |
| メ 貳百 ^マ 貳拾壹文 | | | 一 壹文 | 堀田ニ而茶代 |
| 十八日 大寒 天氣 | | | メ 四百六拾七文 | |
| 一 拾貳文 | 浄土山御明 | | 一 百拾文 | 高岡ニ而茶わん三ツ |
| | | | 一 廿七文 | うつわ四本 |

〆百三拾七文
 〆六百四文
 一 貳百文 所々ニ而酒等買喰仕ル
 一 四拾五文 芦峯御姥御明

以上の諸経費を整理すると以下の通りである。

〈収支決算〉

収入の部 金子 1両1朱
 (持参金) 印紙 27匁
 正銭 700文

支出の部 金子 2歩2朱
 印紙 16匁
 正銭 700文

残金 金子 1歩3朱
 印紙 11匁

さらに支出を詳細に見ると以下の通りである

支出明細

| | | |
|-------|-------|-------|
| 6月15日 | 支払い | 238文 |
| 16日 | 支払い | 457文 |
| 17日 | 支払い | 221文 |
| 18日 | 支払い | 250文 |
| 19日 | 支払い | 330文 |
| 20日 | 支払い | 604文 |
| | 所々で酒代 | 200文 |
| | 嬭堂御明代 | 45文 |
| | | 2345文 |

高岡で支出 1360文 (16匁)

所々で支出 700文
 2060文

合計 2345文+2060文=4405文

したがって、天保10年(1839)の名苗善三郎の事

例では、氷見から5泊6日の立山参詣の彼の支出は、4,405文であることがわかる。他に、清蔵へ1歩支^{ママ}払っている。

2-2-2 弘化三年(1846)の立山参詣の旅費

弘化3年(1846)6月、葛葉村新十郎倅名苗茂三郎は、27日から7月2日にかけて5泊6日で立山に登拝した。史料②は、その時の道中記(横帳・仮綴)を部分翻刻したものである。

【史料②】

(表紙)

丙 弘化三年 葛葉村新十郎内
 十九歳 茂三郎

立山参詣入用留帳

拾九歳

午 六月廿七日仕立七月二日帰ル

覚

廿七日 天気

一 拾八文 氷見いなつみや 酒

一 拾文 六道寺舟ちん

昼

一 貳拾貳文 放生津ちゃ屋茶代等

一 貳百文 富山ふじたや惣衛門泊り

一 拾八文 同飯

〆貳百六十八文

天気

廿八日 朝

一 拾四文 わらんし貳束

一 貳拾四文 成願寺舟渡ちん

一 拾五文 中屋西瓜茶代等

一 百五拾九文 岩倉切手御礼銭

一 六拾五文 岩倉米代

但シ壺人ニ七合ヅツ

中ごハ壺升壺合^{ママ}

一 百貳十文 中ご岩倉ニ而渡ス

| | | | |
|----------------|-------------------|-----------|-------------|
| | 昼中道坊様ニ而飯喰 式匁ヲ五ツ着 | 一 六文 | 桑谷休茶代 |
| 一 二拾六文 | 中道坊様江 | 晦日晚 | |
| 一 式文 | ちかけ 血流村茶代 | 一 四拾五文 | あしくら米代 |
| | 此あたりとうたつ | 一 七拾八文 | 惣衛門様ニ泊 |
| | 雨ふるかみなりなる | メ百式拾三文 | |
| 廿八日 晩 | | 一 拾九文 | 酒代あしくらニ而 |
| 一 廿文 | そうこうえん 安神丸 | 一 八文 | わらんし一東 |
| 一 三拾八文 | あしくら酒呑 | 一 式拾文 | 中ご酒代トシテ岩倉ニ而 |
| 一 拾六文 | 嗜堂御明 | 一 拾文 | 常願寺舟ちん |
| 泊り | | 一 三拾文 | 富山ニ而もぐさ十ツ |
| 一 百七拾文 | あしくら宿 | 一 百四拾文 | はさみ壺一 |
| | 惣衛門様ニ泊り | 一 百式拾文 | 小刀壺一 |
| 一 三拾四文 | 中ご宿銭 | 一 廿四文 | 髪結 |
| 天気 | | 一 百五拾文 | 蔵明内 |
| 廿九日 朝七ツ時雷なる雨ふる | | 一 五十文 | 五蔵円 |
| 一 八文 | わらんし一東 | 一 式文 | 安念坊山おいわけ茶代 |
| メ七百三十五文 | | 一 拾六文 | 大門橋ちん |
| 廿九日 昼 | | 七月朔日 | |
| 一 六文 | 桑谷休茶代 | 一 百八拾文 | 高岡宮嶋屋泊り |
| 泊り | | メ八百九拾八文 | |
| 一 式拾式文 | むろ堂米買代 | 一 七文 | わせ壺東 |
| | 但 六人ニ壺人中ご | 一 百九拾八文 | やたて壺丁右下ニ渡ス |
| | トシテ 壺升七合代 壺升代百□ | 一 百六拾八文 | 氷見いなづみ屋 |
| 卅日 | | | 酒壺升壺合代 |
| 一 四十文 | 中ご宿銭 | 昼 | |
| 一 式百文 | 浄土山別山等山銭 | 一 廿七文 | にしめ三ぜん |
| 一 五拾文斗 | 地獄谷地藏銭 | 一 三百八拾文 | ふり五文づつ三東 |
| 卅日朝 天気 | | | びん付式十兩十一文づつ |
| 一 八文 | 浄土山御明 | 一 三拾文 | から松せんべい |
| | きりがふる | 一 五拾文 | さとしやうが |
| 一 拾式文 | 御本社御明 | 一 四拾五文 | こんべいとう |
| 一 式拾五文斗 | 御山中地藏御明 | 一 拾文 | 弁喰はし 式せん |
| | 大なんじ別山ニ而 | 一 六拾文 | ふですみ |
| | 昼 中腹 是も下向 くだり坂はしる | 一 三文 | ところてん |
| 一 四拾文 | 中ご収まりちん | メ九百五拾壺文 | |
| メ四百三文 | | メ三貫式百五拾五文 | |

(弘化四年上京の記録につき後略)

この諸経費を整理すると以下の通りである。

支出明細

| | | |
|-------|---------|-------|
| 6月27日 | 昼までの支払い | 268文 |
| 29日 | 朝までの支払い | 735文 |
| 30日 | 昼までの支払い | 403文 |
| 7月1日 | 朝までの支払い | 898文 |
| 7月2日 | 昼までの支払い | 951文 |
| | | 3255文 |

したがって、弘化3年(1846)の名苗茂三郎の事例では、氷見から5泊6日の立山参詣の彼の支出は、3,255文であることがわかる。

小結

江戸時代、立山山麓の岩峯寺・芦峯寺には、加賀藩の庇護のもと宿坊が建ち並び、多くの参詣者を迎入れた。その宿泊費は、天保15年(1844)の金子盤蝸の芦峯寺福泉坊での宿泊で150文、それ以前の文政6年(1823)の尾張藩士某の芦峯寺教算坊でも150文と記されており、天保10年(1839)の葛葉村の名苗善三郎や弘化3年(1846)の名苗茂三郎の芦峯寺

での宿泊費をみると、近世後期においては150文～200文であったと考えられる。ただし、木賃宿として宿泊する場合もあり、その際は宿賃70文～78文を支払って別途、米や薪を購入している。

参詣者は、途中で中語を雇い、岩峯寺で山銭150文を支払っている。山銭の値段は文化11年(1810)の葛葉村名苗新重郎の時も150文²⁸⁾であったが、文政6年(1823)の尾張藩士某では130文、文化13年(1816)の野田成亮では、山開きを早めさせたこともあり238文支払っており、その時々々の相場だったのではないだろうか。

山銭を支払った参詣者は、室堂で請取書を渡し、宿泊している。『立山遊記』によれば、室堂は広さ65㎡(4間×5間(7.2m×9m))の棟が2つあり、岩峯寺の僧3人俗人2人が常駐しているという。本日の宿泊者は200人、多いときには500人も泊まると記されており、『立山紀行』でも200人余り泊まっているとあることから、かなり窮屈だったに違いない。ただし室堂での宿泊費は、こもり堂としての認識で、宿泊を含めた入山料として山銭に含まれたと考えられる。

3. 現代の貨幣価値にみる立山参詣費用

前章で天保10年(1839)、天保15年(1844)、弘化3年(1846)の立山参詣の諸経費を文献資料をもとに提示した。そこでこれらの諸経費を捻出する経済的負担の精神的境遇や当時の立山における物流や物価などについて、より具体的に考察する一助として、現在の貨幣基準に換算するとどれだけの値段になるかを試算してみたい。ただし江戸時代は、約260年の間で年代や地域によって物価変動にもなって貨幣価値も違っているので、本編では年代の近接する上記3例をとりあげ、天保14年(1843)「入払帳」(旧金沢藩士 猪山家文書、筆者未見)をもとにして

換算を試みる。猪山家は、江戸時代後期、加賀藩御算用場に御算用者(会計係)として登用された家で、その家の出納事情に関する充実した記録も残していることで知られる。それらの文書群の分析によって当時の加賀藩における貨幣価値が『武士の家計簿』³⁴⁾に平易に示されたので(【第1表】)、これを基準に据えて換算してみたい。

なお、それでも天保14年(1843)から約±3年余りの幅があるが、その間の物価変動による貨幣基準については、特別に考慮していない。

【第1表】江戸時代の貨幣と価値

| 換算単位 | 銭(文) | 現代感覚① | 現代感覚② |
|------|-------|-------|--------|
| 米1石 | 5,670 | 27万円 | 5万円 |
| 金1両 | 6,300 | 30万円 | 55555円 |
| 銀1匁 | 84 | 4000円 | 666円 |
| 銭1文 | 1 | 47.6円 | 8.8円 |

猪山家文書「入払帳」の天保14年の両替データより

現代感覚①は、現在の賃金から換算

(金沢での大工見習いの日当)

現代感覚②は、現在の米価から換算

(出典:「武士の家計簿」³⁴⁾「江戸物価事典」³⁵⁾)

3-1 立山登拝費用

立山登拝にかかった主な諸経費を現代感覚①(現在の賃金から換算)で費用を置き換えると、一人当たり以下の通りになる。

- 中語雇い賃 5,712円(120文)
立山登拝に向かう途中で、登山者に信仰名所の唱導を行い、また荷物を運んだり、室堂での食事準備をする中語を雇う。
- 宿泊料 7,140円(150文)~9520円(200文)。
山麓の芦峯寺や岩峯寺での1泊2日の宿泊料
但し宿賃だけの場合は、3332円(70文)~3713円(78文)で他に米や薪を買っている。
- 山銭 7,140円(150文)
入山料の山銭は、岩峯寺で支払い、室堂で請取書を渡している。
- 三山巡り14,280円(300文)
浄土山・峰本社・別山に登拝する際に、室堂の僧に一山につきそれぞれ100文を支払う。金子盤蝸の事例では、約200人の登拝者があったが、その内20人くらいが浄土山に登り、別山に登ったのはわずか12・3人であったと記されている。
- 血盆経代 143円(3文)
地獄谷の血の池へ納める血盆経一巻の値段。
血盆経とその版本は現存しており、立山博物館で保存・展示している。

- 桑谷 286円(6文)
桑谷にて休憩し、茶代ないし関銭という名目で6文を支払っている。池大雅の『三岳紀行』では、「廿四文 桑谷せつたい こんぶ汁四膳」と記されている。
- 燈明料 御本社で571円(12文)
山麓の芦峯寺嬭堂から、御本社にかけて「御明代」として、何か所にもわたり支出している。池大雅の『三岳紀行』では、「三十文 道々 小宮さいせん」と記されていることから、「御明代」と称した賽銭ではないだろうか。

3-2 立山登拝以外の主な旅費

立山参詣には、上記で提示した登拝だけの支出だけではなく、自宅を出立してから帰るまでにかかった食費(三食・飲酒・菓子代)、宿泊費、交通費(船賃)、お土産代、雑費(草鞋代など)の旅費が必要である。そこで、『名苗家文書』の道中記を素材として、主な旅費を現在の貨幣基準に換算する。

3-2-1 天保10年(1839)の名苗善三郎1人分の旅費

- 宿泊費 40,698円(855文)
(内訳) 15日 200文 放生津
16日 200文 芦峯寺先祖寺
17日 室堂
18日 200文 芦峯寺先祖寺
19日 255文 小杉町稲炭屋
- 茶代、酒代 16,184円(340文)
(内訳) 15日 2文 泉で茶代
15日 2文 本宮村茶代
19日 10文 茶代うり等
20日 125文 酒5合代
〃 1文 堀田で茶代
〃 200文 所々での酒代

- 船賃など 1,904円 (40文)
 (内訳) 15日 36文 氷見より放生津迄船乗賃
 20日 3文 大川橋賃
 ♪ 1文 木町舟賃
- 草鞋代 952円 (20文)
 (内訳) 16日 15文 3足
 20日 5文 1足
- お土産代 22,610円 (475文)
 (内訳) 19日 40文 もくさ
 20日 24文 5匁懸ろうそく2丁
 45文 泥香4つ
 14文 せんこう 2束
 65文 うつわ 5本
 40文 扇子 2本
 40文 うつわ 2本
 80文 薬、酒
 100文 茶碗 3つ
 27文 うつわ 4本

名苗善三郎の場合、自宅を出立してから帰るまでにかかった5泊6日の立山参詣の旅費は、登拝費用や雑費など2,645文を加えて総額は、1人約21万円(4,405文)であった。

3-2-2 弘化3年(1846)の名苗茂三郎1人分の旅費

- 宿泊費 32,035円 (673文)
 (内訳) 27日 200文 富山ふじたや
 28日 170文 芦峯宿惣衛門
 29日 室堂
 30日 123文 芦峯宿惣衛門
 1日 180文 高岡宮嶋屋
- 茶代、酒代 11,424円 (240文)
 (内訳) 27日 18文 氷見いなつみやで酒代
 28日 15文 中屋で西瓜茶代
 ♪ 2文 千垣で茶代
 ♪ 16文 芦峯寺で酒呑

- 30日 19文 芦峯寺で酒代
 ♪ 2文 安念坊山おいわけ茶代
 1日 168文 氷見いなつみやで酒代
- 船賃など 2,856円 (60文)
 (内訳) 27日 10文 六道寺舟賃
 28日 24文 常願寺船賃
 30日 10文 常願寺船賃
 ♪ 16文 大門橋賃
- 草鞋代 1,438円 (30文)
 (内訳) 28日 14文 2足
 29日 8文 1足
 30日 8文 1足
- お土産代 41,888円 (880文)
 (内訳) 30日 30文 もくさ10
 140文 はさみ1
 120文 小刀1
 150文 蔵明内
 50文 五蔵円
 1日 7文 わせ1
 198文 矢立
 30文 から松せんべい
 50文 砂糖しょうが
 45文 こんべいとう
 60文 ふですみ

名苗茂三郎の場合、自宅を出立してから帰るまでにかかった5泊6日の立山参詣の旅費は、登拝費用や雑費など1,372文を加えて総額は、1人約15万5,000円(3,255文)であった。

小結

立山登拝にかかった費用に限って、現代の貨幣価値に換算してみると以下の通りになる。

天保10年(1839)の名苗善三郎の場合、6月16日～18日の3泊3日で、宿泊料19,040円(400文)・山銭 7,140円(150文)・三山お礼9,520円(200文)合わせて35,700円とこの他にも御明代や茶代、草鞋代

などを含めると、約44,200円(928文)ほどになる。

天保15年(1844)の金子盤蝸の場合、6月24日～26日の3泊3日で、中語雇い賃 5,712円(120文)・宿泊料13,947円(293文)・山銭 7,140円(150文)・三山巡り14,280円(300文)合わせての41,079円とこの他にも賽銭や茶代、血盆経購入代などを含めると、約5万円ほどになる。

弘化3年(1846)の茂三郎の場合、6月28日～30日の3泊3日で、中語雇い賃 5,712円(120文)・宿泊料13,947円(293文)・岩嶮寺切手御礼銭 7,568円(159文)・浄土山別山巡り9,520円(200文)合わせて36,747円とこの他にも御明代や茶代、米代などを含めると、約6万円(1,261文)ほどになる。

以上の事例によると、近世後期頃の立山登拝では、芦峯寺に到着してから、室堂に泊まり、芦峯寺に戻るまでにかかった費用は、現代の貨幣価値で約45,000円～60,000円であった。今日、立山黒部アルペンルートの立山駅⇄室堂間の片道運賃はケーブルカーが700円 高原バスが1,660円であわせて2,360円、往復では割り引かれて4,190円である。これに、室堂周辺の山荘やホテルの宿泊費1万円～2万円を加えても、近世後期に立山登拝する方が、はるかに高額なのが見える。『立山遊記』によれば1人当たり中語雇い賃5,712円(120文)、三山(浄土山・本社(雄山)・別山)の上り賃14,250円(300文)の

山案内の人員費分だけで約2万円もかかっている、

次に、氷見の葛葉村名苗家から5泊6日で立山登拝をした場合、天保10年(1839)の名苗善三郎で約21万円、弘化3年(1846)の名苗茂三郎では約15万5,000円かかっている。現在、氷見の葛葉村から立山登拝した場合の片道運賃は、加越能バス630円(触坂→JR氷見駅)、JR650円(氷見駅→富山駅)、富山地鉄1,170円(電鉄富山→立山駅)、立山黒部アルペンルート2,360円(立山駅→室堂)をあわせて4,810円、往復では割り引かれて9,090円である。もとより今は、交通網の発達で、1泊2日で十分に立山登山が可能であり、中には5,000円からの日帰りの立山バスツアーもみられる。

名苗善三郎や名苗茂三郎の場合、立山登拝費や宿泊費もさることながら、道々での酒代やお土産代に多額のお金を使っていることがわかる。善三郎は、茶代・酒代が16,184円(340文)、お土産代が22,610円(475文)、高岡と所々の支出98,056円(2060文)をあわせると136,850円に、茂三郎は、茶代・酒代が11,424円(240文)、お土産代が41,888円(880文)をあわせると53,312円になる。

近世後期の立山参詣には、いかに多くのお金がかけられているか。そこには、民衆の敬虔な信仰心とあわせて旅への解放感から派生する遊樂的な要素が多分に含まれているからにほかならない。

まとめ

今も昔も旅の楽しみは、旅を計画すること、旅の最中、そして帰ってからの旅の思い出にあるのではないだろうか。

尾張藩士某『三つの山巡』では、日頃から三山（白山・立山・富士山）を巡りたかったが、仕事があるためなかなか願いが叶わず、この度やっと友と旅立つことができた。また、上田作之丞『老の路程』でも、「愚老立山に登らんと志す事数年、一時勝因を得て登山す」と数年来の願いが叶って立山に登れたと記しているように、なんども旅先への思いをめぐらせ、旅立てることが大きな喜びであった。

では、当時の人々は、インターネットやテレビ・雑誌など情報媒体が十分でない時代に、立山の情報をどのように手に入れたのだろうか。近世には、立山地獄を題材にとった寛文元年（1661）に鈴木正三が著した『因果物語』や文政11年（1828）に十返舎一九が著した『越中立山参詣紀行方言修行金草鞋』などの文学作品が刊行され流布したり、第1章で紹介した多くの紀行文や道中記を通じて立山参詣のこのを知ることができた。ただし多くの人々は、立山へ参詣した人の体験談＝土産話を口伝えに聞いて、立山への羨望やあこがれを抱いたのではないだろうか。佐藤季昌（月窓）『立山紀行』によれば、彼らが立山下山の途中で「常願寺川わたる頃、迎ひのもの出て来りて、中市村にて、酒・肴・とんじき、取りちらしたり。やがてはらから稚まきまで出て来て、わらひつ、歡びつ、うれしさ限りなし」として、村人から近向かえをうけ、そこで立山参詣の土産話に花が咲いた様子を思い浮かべることができる。

また一方で、迎いれる側の立山山麓の村々でも、参詣者に少しでも多く来てもらうために、岩峠寺衆徒による出開帳²⁹や芦峠寺衆徒による檀那場廻りなどを通して立山信仰の布教とともに情報発信をおこなっている。その際に用いられたのが「立山曼荼羅」

であり、人々を参詣の旅へと誘っていったのである。こうして、立山は、近世には全国から多くの人々を集める一大参詣地の一つになっていた。

当時の人々の立山参詣の旅の様子は、多くの紀行文や道中記を通じてうかがうことができる。氷見では、町役人田中屋権右衛門の息子八郎や、葛葉村名苗家新十郎の息子善三郎・茂三郎が19歳で仲間と連れだって立山に参詣しており、立山に登らない内は一人前ではないという風習があったと考えられる。また、尾張国大府村の13名の一行が51日を費やして白山・立山・富士山を巡っており、彼らの参詣の目的は、信仰だけに限らず所々の名所見物であり、『三つの山巡』の尾張藩士某や『立山遊記』の金子盤蝸のように立山登拝後、足をのばして立山温泉への湯治などもみられた。

ただし、旅には出費はつきものである。宿賃、交通費、茶代・酒代、物の購入、中語への支払い、寺社への初穂・賽銭、土産代など多岐に渡っている。『名苗家文書』の善三郎の場合、これらの支払いには、金子や銭のほかにも印紙が使われており、重い銭貨を大量に持ち歩くことなく身軽な旅ができたと考えられる。また『三岳記行』で池大雅らが、室堂で銀4匁1分を254文で両替（銀1匁を62文で両替）しており、18世紀中頃までには貨幣流通が立山山中の室堂までおよんでいたことがわかる。

出費の総額については、19世紀中頃氷見の葛葉村から5泊6日の立山参詣で、名苗善三郎の場合で約21万円、名苗茂三郎の場合で約15万5,000円かかっている。これだけの金額と日数があれば、今日では海外諸国への旅も可能である。それだけに、当時の人々にとっての立山参詣は、生涯の中でも非日常に身を置くことができた、高価で貴重な旅であったと考えられる。

註

- 1)『古代山岳信仰の史的考察』(高瀬重雄、角川書店、1969年4月) 295頁～297頁所収
- 2)『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(新城常三、塙書房、1982年5月) 699頁～705頁所収
- 3) 新城常三氏の『社寺参詣の社会経済史的研究』が出版されて以来、たとえば富士山においては、青柳周一氏による『富嶽旅百景 観光地域史の試み』(角川書店、2002年2月)や伊勢・熊野・出羽三山など著名な場所の研究は進められている。しかし、地方の霊場の1つである立山についての社会経済史からのアプローチはみられない。
- 4)『立山遊記・立嶽登臨圖記』(正橋剛二、桂書房1995年9月)
- 5)「名苗家文書」は、現氷見市葛葉に居住する名苗家伝来の文書である。名苗家は江戸時代より肝煎役をつとめる旧家で、氷見市の平成12年の調査では11,020点にのぼる膨大な史料が確認されている。
- 6)『廻国雑記』(国立公文書館内閣文庫蔵)
翻刻文は、『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年) 11頁所収
- 7)『善光寺紀行』(国立公文書館内閣文庫蔵)
翻刻文は、『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年) 3頁所収
- 8)『北国紀行』(国立国会図書館蔵)
翻刻文は、『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年) 7頁所収
- 9)『室堂永代燈明料奇進状』立山町岩嶮寺雄山神社には『岩嶮寺雄山神社蔵文書』として、明応元年(1492)の古文書をはじめとして近世文書を中心に500点余りの古文書や絵図が所蔵されている。
翻刻文は『越中立山古文書』(木倉豊信編、国書刊行会、昭和37年) 資料No.134・209頁所収
- 10)『日本行脚文集』所収「立山路行」(国立国会図書館蔵)
翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年4月) 23頁～33頁所収
- 11)『一宮巡詣記』(国立公文書館内閣文庫蔵)
翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年4月) 175頁～180頁所収
- 12)『三岳記行』(京都国立博物館蔵、八曲小屏風に貼られている)
翻刻文は図録『日本の美 国宝との出会い展』(京都国立博物館、2009年10月) 140頁～143頁所収
- 13) 高瀬重雄「池大雅とその三岳紀行」(『立山信仰の歴史と文化』名著出版、1981年3月) 190頁所収
- 14)『立山紀行』(富山県立図書館蔵)
翻刻文は『肯構泉達録』(野崎雅明著、KNB 興産、1974年11月) 394頁～415頁所収
- 15)『立山紀行』によれば、峯本社の宝物とは
有頼、熊ヲ射矢根
有頼 刀 無名
行基菩薩奉納 錫杖
蓼股鎌
若狭老尼額角
北山石蔵口牙
光蔵坊爪
藤原直丞角
大錢三文 其外異国ノ古錢多
- 16)『越中立山古文書』(木倉豊信編、国書刊行会、昭和37年) 資料No.108 (50頁)によれば、嬭堂は、天明5年(1785)に焼失している。
- 17)『立山禅定』(福光図書館蔵)
翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年4月) 443頁～447頁所収
- 18) 海保青陵が京都万福寺の門人禎文に宛てた書簡(富山県[立山博物館]蔵)
- 19)『古代山岳信仰の史的考察』(高瀬重雄、角川書店、1969年4月)

- 442頁～444頁所収
- 20) 『立山ノ記』(富山県立図書館蔵)
翻刻文は『肯搆泉達録』(野崎雅明著、KNB 興産、1974年11月) 386頁～393頁所収
- 21) 『九峯修行日記』(宮崎県立図書館蔵)
翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年4月) 559頁～569頁所収
- 22) 『三ツの山巡』(国立国会図書館蔵)
全文翻刻は加藤基樹「三禪定」(『富山県 [立山博物館] 研究紀要第17号』、富山県 [立山博物館] 2010年3月) 92頁～115頁所収
- 23) この梵鐘は、明治時代の廃仏毀釈で川向かいの本宮の念法寺に移され、現在もこの寺に残されている。
- 24) 『三山道中記』(個人蔵)
翻刻文は図録『靈山巡詣』(富山県 [立山博物館]、1995年6月) 48頁～49頁所収
- 25) 『老の路種』(加越能叢書、金沢文化協会、1937年8月)
- 26) 『登立山記』(高岡市立中央図書館蔵)
翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年4月) 651頁～656頁所収
- 27) 『五ヶ山大牧入湯道の記』(金沢市立図書館蔵)
翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994年4月) 658頁～709頁所収
- 28) 翻刻文は、『氷見市史6 資料編四 民俗、神社、寺院』(氷見市史編さん委員会、2000年7月) 700頁～703頁所収
- 29) 『應響雜記(下) 越中資料集成8』(児島清文、伏脇紀夫編、桂書房、1990年6月) 443頁・445頁に所収
- 30) 『善光寺并北國越中立山参詣』(不破幹雄氏所蔵)
翻刻文は、『岐阜県史 史料編 近世7』(岐阜県編集・発行、1971年3月) 541頁～546頁所収
- 31) 『加賀藩史料 第15編』(前田家編、石黒文吉、1943年5月) 197頁～199頁所収
- 32) 『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(新城常三、塙書房、1982年5月) 1224頁～1228頁所収
- 33) 「越中立山温泉と略縁起」加藤基樹(堤邦彦・徳田和夫編、『遊樂と信仰の文化学』森話社、2010年10月)
- 34) 『武士の家計簿』(磯田道史、新潮社、2003年4月) 江戸時代の貨幣と価値の基準 54頁・55頁所収
- 35) 『江戸物価事典』(小野武雄、展望社、2009年6月) 180頁～181頁所収の江戸の銭の価によれば、天保年間には金1両につき7貫文、のち6貫4百文に落ち着いた。454頁～475頁所収の米相場表によれば、天保14年7月の加賀米1石は、銀69.1匁であった。
- 36) 詳細については、拙稿「岩嶺寺衆徒の出開帳」(『立山博物館研究紀要』第10号、富山県 [立山博物館]、2003年3月) 47～62頁所収

附記 ①

本稿における月日表記は、旧暦を用いた。

附記 ②

本稿における史料の凡例は以下のとおりとした。

- ・句読点は筆者が付した
- ・変体仮名はひらがなに直した。
- ・旧字、異体字は可能な限り常用漢字に直した。
- ・「より」は原本に即して「記号」で示した。